

函館学 2007 会議資料

8 高等教育機関合同公開講座 函館学 2007

PM2:00~3:30

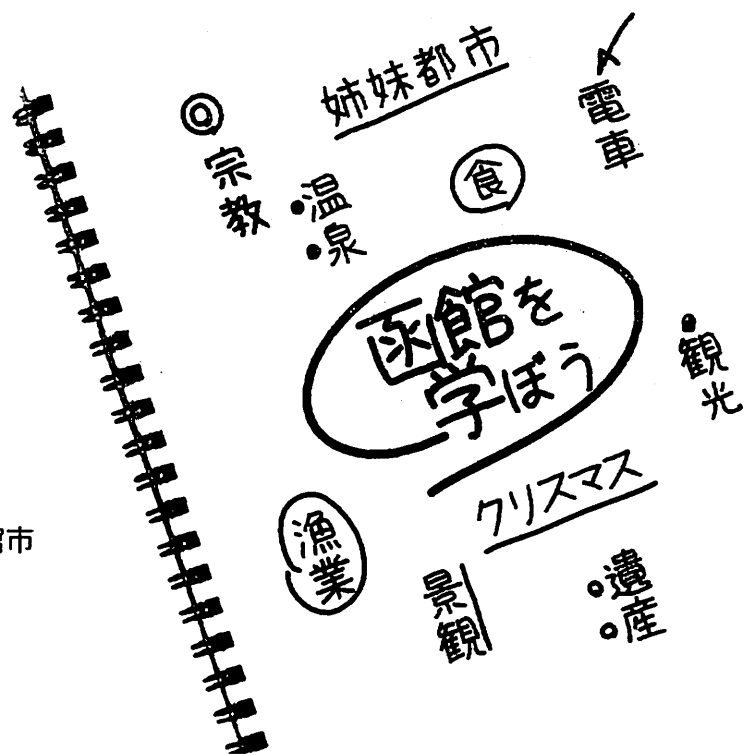
12/8 土

函館のまちで近代化遺産を探そう

函館工業高等専門学校 教授 葦澤憲吉

会場 函館工業高等専門学校

主催 函館市高等教育機関連携推進協議会 函館市
後援 函館商工会議所



【 函館における土木学会選奨土木遺産 】

13

函館市の水道施設群

笹流ダム、元町配水池、管理事務所

函館市 竣工年: 1889(明治22)年、1924(大正13)年

日本で2番目の近代水道と日本初のバットレス式ダム

横浜の水道に次いで明治22年に完成した函館市の水道は、日本人技師の手で完成したわが国初の近代水道施設でした。遠く亀田川に水源を求め赤川の沈殿池に導き、そこから函館山麓の元町配水地に送られた水が市街地に広く給水されました。

函館はその後明治期からの急速な発展によって慢性的な水不足が続き、そのために大正13年には亀田川の支流に日本初のバットレス形式の笹流(ささながれ)ダムが建設されました。このダムは国内でも珍しい形のダムで当時高価だったコンクリートを節約できました。

函館西部地区の元町配水池も赤川の笹流ダムも市民や観光客に開放され、今でも四季を通じて桜や紅葉を楽しむ憩いの場となっています。

7

函館港改良施設群

船入潤防波堤、第1号乾ドック

函館市 竣工年: 船入潤防波堤 1899(明治32)年、第1号乾ドック 1903(明治36)年

北海道初のみなと整備

函館の西部地区の奥まった地点に明治期に整備された旧函館港(現函館漁港)があります。ここはわが国初の貿易港として、また北洋漁業の基地として函館の繁栄と共に歩んできました。

コンクリートブロックを基礎とした石積みの船入潤防波堤は、廣井勇博士設計監督によるもので小樽港北防波堤の1年前の仕事でした。第1号乾ドックも明治期の函館港の基盤施設として整備されたもので、ともに北海道の港湾修築の先駆的構造物であり、100年以上経過した今でも地域の産業活動を支える施設として現役活用されています。

1

札幌本道赤松並木

七飯町、函館市 竣工年: 1877(明治10)年～

地域住民や道路利用者に愛され育てられてきた赤松並木

札幌本道は、北海道の玄関口の函館と開拓使本庁の置かれた札幌をつなぐ北海道開拓の幹線道路として整備された、約224kmのわが国最初の西洋式馬車道です。

明治9年、明治天皇が七重勸業試験場に行幸されたのを記念して、翌10年にかけて札幌本道沿いに松などの樹木を相当数移植したものが、現在の赤松並木のもとになりました。赤松並木は、函館市桔梗町から七飯町峠下までの一般国道5号の約14km区間に1420本、その高さは20mを超え幹径は80cmに達しています。現在も地域住民によって保存育成活動が盛んに行われ、ここの赤松は七飯町の町木に指定されています。特に、大中山から鳴川町の2kmにわたる並木は、樹齢100年を超えた巨木の樹形もよく、両側の土塁の上から路上に枝を広げた緑のトンネルは圧巻です。

平成 18 年度 土木学会選奨土木遺産・北海道支部選奨土木遺産選定理由書

土木遺産名	札幌本道赤松並木
竣工年月日	明治 6 年（1873）札幌本道の完成に合わせて、開拓使によって明治 7 年から 10 年にかけて、新道（札幌本道）の両側に赤松が移植された
規 模	一般国道 5 号、函館市桔梗町から七飯町峠下までの、14.3km の区間 1400 本以上の赤松が道路の両側に立ち並び、赤松並木を形成している 高さが 20m に達する樹齢 100 年を越えた巨木がそのまま保存されている
管 理 者	国土交通省 北海道開発局 函館開発建設部

推薦の理由

「 概 要 」

明治 2 年（1869）2 月、東京に開拓使が置かれ、同年 9 月には、開拓使出張所が函館に置かれた。北海道の開拓が急務であったわが国は、明治 4 年（1871）1 月に開拓使次官・黒田清隆を渡米させ、当時のグラント大統領と技術者派遣を交渉し、同年 5 月、アメリカ農務長官ホーレス・ケブロンと、農務省の部下のアンチセル、ワーフィールド、エルドリッジの 3 名を日本に招いた。

開拓の中心が札幌に移ったことによって、ケブロンの北海道開拓の提言をもとに、北海道の玄関口の函館と開拓使本庁のある札幌の間をつなぐ北海道開拓の幹線道路として、札幌本道の開削が開始された。明治 4 年（1871）9 月、アンチセル、ワーフィールドによって、函館—札幌間の地形や港湾の踏査が行われ、函館から森までは陸路、森から室蘭までは（道路を作るのが困難だったので）噴火湾を海路で、室蘭から鷺別、豊平を経て札幌へは陸路と、ルートが決定された。

わが国最初の近代道路というべき道は、明治 6 年（1873）6 月に完成。函館・札幌間約 223.8km のわが国で最初の西洋式馬車道が「札幌本道」と定められた。

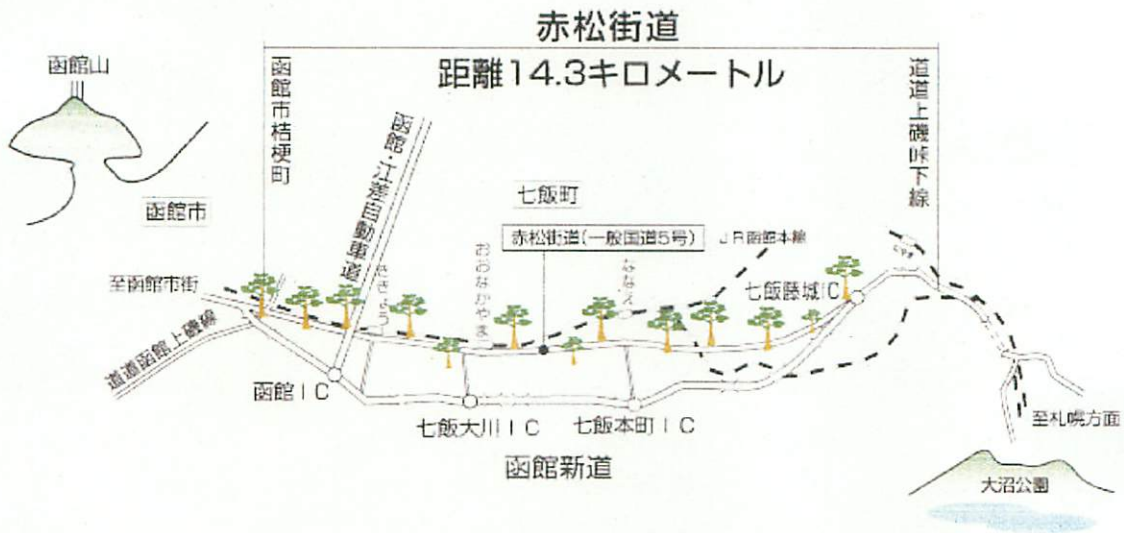
そのころ開拓使では、札幌農学校を開き、各地に試験農園（官園）を作るなど、本州と異なる気候の北海道の農業開拓のために様々な事業を試みていたが、「七重官園」で管理・育成していた苗木を、明治 6 年（1873）札幌本道の完成に合わせて、新道開通後、明治 7 年から 10 年にかけて、札幌本道の両側に移植させた。これらの七重の赤松は、安政 4 年（1857）箱館奉行支配組頭栗本瀬兵衛（栗本鋤雲）が故郷の佐渡の種子を七重薬草園（のちの七重官園）で育てたのが元になったものであり、文久 2 年（1862）この種子が樹高 1.4m ほどの苗木に育ち約 10 万本に増えたので、その中から選りすぐって、園丁頭の吉野鉄太郎に命じて、いったんは旧道（札幌本道以前の道）の両側に移植されていたものである。

さらに、明治9年(1876)、明治天皇が七重勸業試験場(七重官園から改称)に行幸されたのを記念して、明治9年から翌10年にかけて札幌本道沿道に相当数移植されており、これがいまの赤松並木の原形となっている。また、さらに昭和16年(1941)には、照宮成子内親王殿下の大沼行啓を記念して一部補植も行われた。

この赤松並木は、昭和26年(1951)に、北海道庁から北海道開発局に引き継がれ、その管理は、函館開発建設部函館道路事務所が行っている。

一般国道5号の、函館市桔梗町から七飯町峠下の14.3kmの区間に、現在、1420本の赤松が並んでおり、その大きなものでは高さが20mを超え、幹径も80cmに達するものがある。中でも、七飯町の大中山から鳴川町までの約2kmにわたる並木は、樹齢100年を越えた巨木がそのまま保存されており樹形もよく、両側の土塁の上から路上に枝を広げたその緑のトンネルは圧巻である。

赤松の天然分布は、青森県下北半島が北限とされているが、札幌本道の赤松並木は北限を越えて北海道の厳しい自然条件下で、130年以上の歴史を持つ並木に育っていることになり、昭和47年(1972)には、北海道自然保護条例によって、環境緑地保護区に指定されている。



明治時代の赤松並木



現在の赤松並木

札幌から函館に拠点を移して七年が経過した。これはわたしの話。

和人が来てから八百年以上が経過した。これは函館の話。

義経が蝦夷に渡って来たという英雄不死伝説が残っているように、源頼朝による奥州藤原氏征討の敗兵が逃げ渡ったのが、蝦夷地・箱館に本州和人（シャモ）が渡って来た「最初」であったと言われている。しかし、板碑や鰐口などの記録から箱館定住の物的証拠がみられるのは南北朝時代である。室町時代に入ると、いくつもの館（道南十二館など）が築かれ箱館地方は繁栄の一時代を迎えるのだが、それまでのアイヌとの共住関係が崩れる事件（コシャマインの乱、永正の乱）で和人は松前・上ノ国方面に逃げ移り、箱館の地は全く衰亡し以後空白の時代が続く。室町中期のことである。

織豊時代になってようやく、ぼつぼつと人がまた住み始めるようになったが、その場所は以前の箱館の地ではなく亀田であった。そこは亀田川が流れていて箱館湾に注いでいた。第一に水の便がよく、肥沃な土地で農業にもそして海辺に出て漁業にも都合のいい場所だった。

ところが、江戸時代中期になると、亀田村から箱館村に移住する人が多くなった。それは、箱館湾に注ぐ亀田川の河口が泥砂で埋まり港を浅くするので、入港の船舶は亀田を避け箱館に碇泊するようになり、船の着く場所に人が集まったからである。

江戸時代後期、箱館の人口は急激に増加し二万人に近づき、町域がどんどんと拡大されていった。大昔の箱館山は孤島で、のちに陸続きになったため、トンボ口（陸繋砂州）部分が細くくびれており、街が発展し港湾機能をよくするためには、海岸の埋め立てが必要だった。内潤町海岸（今の金森倉庫付近）を埋め立て、陸へ掘割（横堀）を通して栄国橋を架けた。地蔵町（豊川町と大手町）にまたがる沿岸には、掘割を通して三つの築島を造り六つもの橋を架けた。そこは「三島六橋」と呼ばれ、水の都のような風景を作った。

ところが、この時代、箱館砂州の港側には家々が立ち並んでいたが、外海の側（太平洋側）には全く家がなかった。港側の地蔵町には高田屋嘉兵衛が掘ってくれた井戸があり飲用水に不自由しなかったが、外海側の地帯はほとんど湿地で清水がなく、人が住める場所ではなかった。ここで、（箱館の都市河川の大事業が行われるのだが、）願乗寺（今の西別院）の法恵（のちに堀川乗経）が亀田川の水をこの地帯に引くことを考えた。安政六年のことである。中ノ橋からほぼ一直線に（現在の高砂通りを）掘り込み、願乗寺の前を通過して横堀（今の銀座通り）へと連結させて、箱館港に流出させる運河工事であった。人々は、これを願乗寺川とか堀川と呼んだ。この掘割に小舟が通い、沿線湿地の汚水が除かれ、付近が乾燥化したので、家がどんどんと建つようになって、箱館が東部方面に広がっていくきっかけとなったのである。

国際開港した箱館は、時代も明治となり、早くから上水道の調査計画を持っていたが、大火や資金不足などの事情で計画が中断していた。そのころ願乗寺川沿線の人々は、朝まだ汚物が流れないうちに川水を汲んで飲用水としていたが、明治十九年に願乗寺川の利用者からコレラ患者が多数出たため、水道計画が復活再調査され、赤川から水を引いた「上水道」が明治二十二年、横浜に次いでわが国二番目に完成を見た。そして同じ時期に、願乗寺川の中ノ橋から大森浜へ新堀（新川）が掘られ、港に流入していた亀田川の流れを変えて太平洋側に排水する事業が行われた。このようにして願乗寺川の旧堀は埋め立てられ、今の高砂通りという道路に替わり、箱館の掘割物語は歴史の陰に隠れてしまったのである。

亀田川の水についての堀割改修の歴史や、三島六橋という味わい深い言葉に残っている箱館の水の風景のことを、函館の町のこれからを考えると忘れてはいけない、と思うのだ。

函館の3つの時代、3人の技術者、3つの遺産

蕪澤 憲吉*

桜の季節になると、函館の市民は五稜郭に集まってくる。

五稜郭（亀田御役所土塁）は、北辺警備強化の必要性から箱館奉行所によって築かれたわが国最初の洋式城郭であるが、蘭学者、武田斐三郎（たけだあやさぶろう）が、それに着工したときは、30歳の頃である。伊予大洲の土族の出身だった。彼は当時、諸術調所（跡地は末広町）の教授として、航海術、砲術など西欧の幅広い実学を伝習していた。五稜郭の星形要塞の形は、フランス軍艦の士官から西洋式築城術の指導を受けたからだと言われている。

斐三郎は、その五稜郭築城に先駆け、外国船の艦砲に対抗する目的で箱館の港の入口にあたる井天岬（今の函館どっくのあたり）に作られた「井天台場」の設計監督もしている。それは面積11,600坪の不等辺六角形の台場で、その図面や写真も残っている。武田斐三郎は、五稜郭という陸の要塞の他に、海の要塞（実はこちらの方がずっと堅固だった）も作っていたのだ。

海や港と言え、われわれには廣井勇（ひろいさみ）といういい先達が居る。土佐生まれの彼は札幌農学校の2期生（明治14年卒）で、近代的築港のさきがけと言われている小樽港の北防波堤を完成させ、日本の港湾技術の生みの親と称されている人物である。廣井は札幌農学校では内村鑑三らと同期で、敬虔なクリスチャンであり、仕事に対しては厳しい使命感を持った清きエンジニアであった。その廣井勇が、小樽港より前に、この函館の町で仕事をしている。

明治29年（1896年）、30代半ばの廣井勇は、道庁技師として函館港（今の入舟町の函館漁港）の改良工事を担当することになった。船着き場の防波堤を築くためには多量の大石の調達が必要となる。さて、どこから持ってくるか…ということになるが、幸いなことに、その港のすぐ脇に、台場としてほとんど活用される機会がなく、そして台場としての役目をすでに終えていた井天台場が残っていた。廣井はその台場の土塁石垣石を取り壊して（その際には台場の石組みの堅牢さに驚いたという記録も残っている）、再利用する形で港の防波堤や護岸防潮堤を建設した。それが今の入舟漁港の石積み堤防に、その当時の姿形のままだら残っている。

というわけで、江戸末期に武田斐三郎が作った台場の石垣が、明治期に廣井勇によって防波堤の石組みに作り替えられたのである（今の建設リサイクルだ）。ともにそれぞれの時代の要請に応じて成した仕事であるが、遠い昔、間に40年という時間を置いて、江戸の洋学実践者から明治の土木技術者へ、技術のバトンタッチが、この函館の港で行われたのである。

そのあと、大正期になると、小野基樹（おのもとき）が仕事をする。彼はこの函館の生まれであって、父親の方は札幌農学校の1期生（廣井勇の一つ先輩）である。基樹の方は京大土木（明治43年卒）を出たあと、33歳の時、東京水道局から函館に派遣されて、笹流貯水池（旧笹流ダム）を設計し建設した。大正12年（1923年）に完成したこのバットレス形式のダムは、当時の技術水準から見ると実に大規模で大胆なものであった。そのときの若い彼の自信に満ちた報告が学会誌に掲載されている。

その笹流ダムも、桜の季節には大勢の市民を集める花見の場所となっている。五稜郭と同じように。

はてさて…、函館に関わる、江戸、明治、大正のそれぞれの時代を代表する土木技術者、武田、廣井、小野の残した遺産は、この町でそれぞれに然るべく地域文化の語り部となっているようである。ならば今あるうちに、せめて廣井勇の函館漁港の石積み堤防について、いま少しみんなで見目してみようか…と思っている。

ぶらり 北海道

●戸井町汐首岬●

宝物探しをする楽しみ



汐首岬にあるイワシ漁の袋澗

戸井町の汐首岬にはたくさんの宝物が隠されているのですが、それを発見してみませんか。

昔のひとが造り上げてひっそりと残したいろいろなもの、それらがいま歴史という籠（もや）の中に隠れそうになっています。放置されたままで覆い隠されたり壊れたりしてしまう前に「その宝物を探し出そう」というわけです。その発見の旅は、道南、函館から海沿いに西に向かい、津軽海峡を挟んですぐそこに本州の下北半島を望む汐首岬まで、約1時間の旅です。

西に20キロ戻れば函館に、東に20キロ進めば恵山へ、そして海の上を南に20キロ渡ると本州の大間町まで行き着くという、そういう中心位置に汐首岬があります。ここは北海道から本州への最短地点。昔から海を挟んで人・物・文化の行き来が盛んで、戸井町と大間町の2つの町は姉妹町です。

その汐首岬あたりで、目を山の方に上げるとローマ時代の水道橋を思わせるコンクリート・アーチ橋が並んでいるのが発見できます。最初に見えるのが汐首陸橋、そのあと瀬田来第一陸橋、瀬田来第二陸橋、蓬内川橋と続きます。これらが今から60年前に造られた旧国鉄戸井線の橋梁群で、五稜郭駅から湯



コンクリート・アーチの汐首陸橋

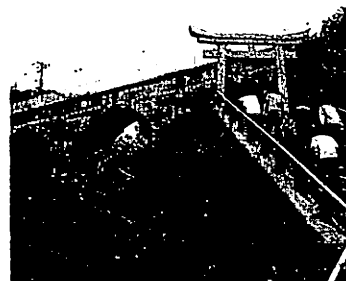
の川経由で戸井町までを結ぶ予定の鉄道でした。津軽海峡防備の戸井要塞に軍事物資を輸送する目的でしたが、26キロまで建設して工事が中断、そのまま戦後を迎えてしまいました。今、蓬内川橋は人道橋として利

用されていますが、他の橋梁群はトンネルを含めて全くの放置状態です。景観的に見ても土木遺産としてもなかなか貴重な

財産であるので、町の宝物として防災の手当をして保存と活用を考えて行こうという意見もあるのですが、みなさんの目にはいかがでしょう？

汐首岬で海辺の方に目を落とすと、こんどは、むかし漁業で使われた袋澗（ふくろま）を発見できます。イワシがたくさん獲れたときに袋網に入れたまま1週間ほど一時的に保管する場所でした。さらにもっと先の海峡に目をやると、時には潮目（しおめ）を見つけることが出来ます。この汐首岬沖では潮流がぶつかりあって魚がたくさん集まり豊かな漁場になっている

のですね。



神社の近くにある蓬内川橋

そもそも鉄道建設の基因となった戸井要塞はどこにあったのでしょうか。もう少し先の戸井高校のグランド近くまで行くと、その要塞の遺構、汐首岬砲台跡を発見することができます。

昭和8年の完成なのですが今でも鮮やかな外壁の迷彩色と成長した樹木を載せた砲側庫に出会うと、まるで童話の世界、ムーミンの森を見つけたような気分になります。

汐首岬には山の昔話があり、そして海の昔話もあります。苦勞なしに与えられることが多くなった今の時代に、そんな昔話を自分で見つける旅に来ませんか。自分の目で宝を見つけ、その宝物が語る昔話を自分の心の中でふくらませてみませんか？

問合せ先： 戸井町役場
電話（代）0138-82-2111
FAX 0138-82-2917

（文 森と山の会 にらさわ麗吉）



戸井高校グランド近くにある汐首岬砲台跡

巨大要塞が守った 多様な自然

函館山と砲台跡

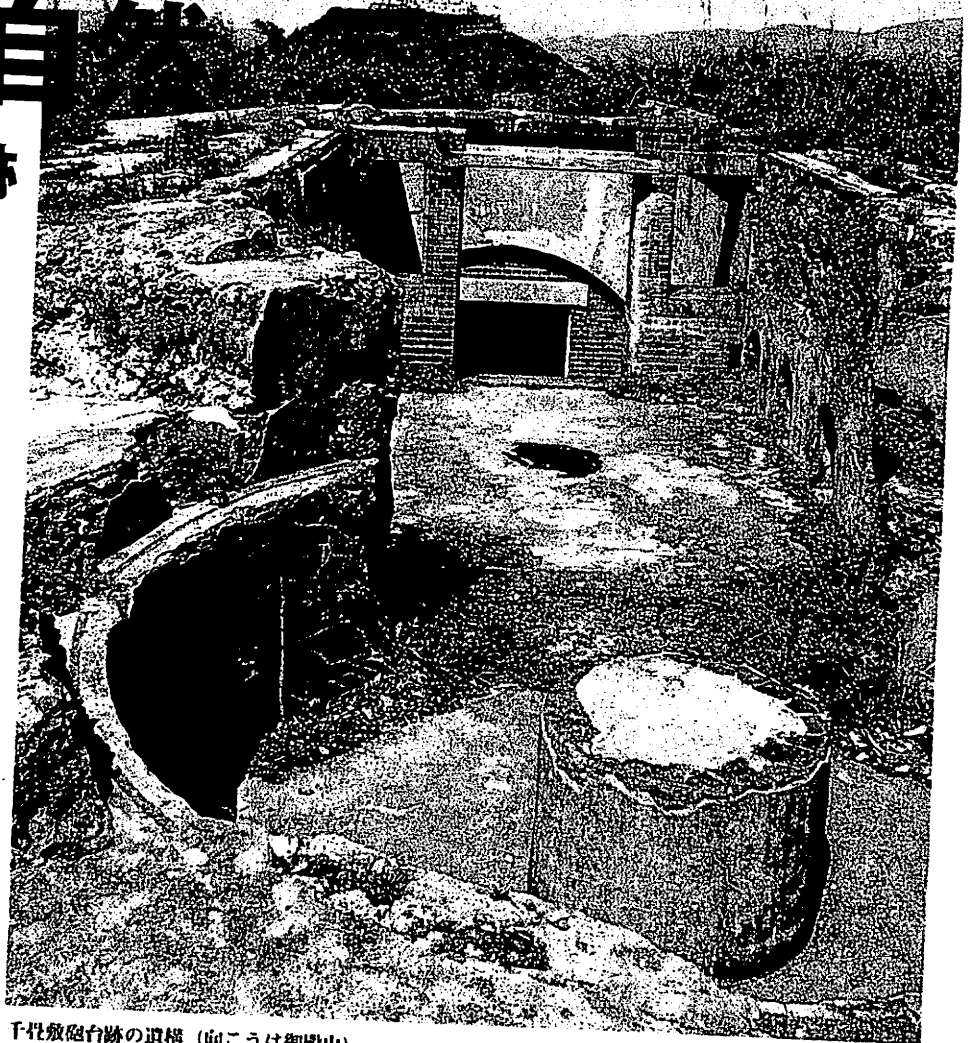
文・写真◎ 菲澤 憲吉

にらさわ のりよし

1946年新潟県生まれ。71年北大大学院工学
科研究科修了。助手、講師。76年助教授。
99年函館高専教授。函館産業遺産研究会会
員。土木学会選奨土木遺産選考委員。



啄木小公園より見た函館山の形（臥牛山）

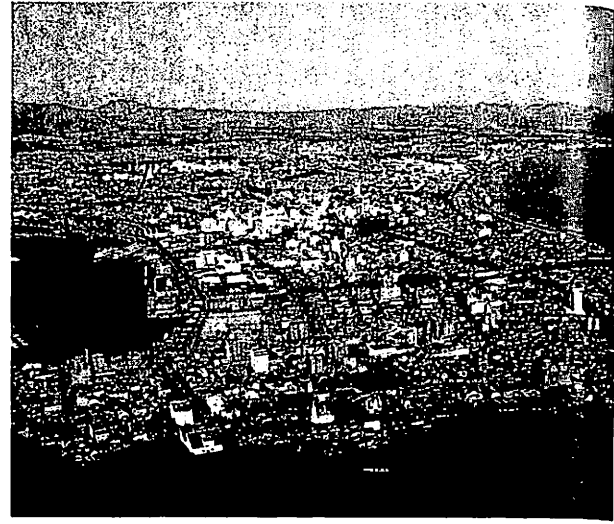


千代敷砲台跡の遺構（向こうは御殿山）

複雑な地形の函館山

「遮るもののない大空に屹立する臥牛山は、まるで巨大な涅槃仏のようでもある」と、辻仁成は「函館物語」の冒頭で、彼らしい大仰な言い方でこの山を語っている。「臥牛山」とは函館山の別名。函館の市街地から見た山の形が牛の寝そべっている姿に見えるということだ。その函館山は海に突き出た陸繋島（トンボロ）であり、函館湾に入る艦船を一望のもとに見下ろすことができる天然の要塞なのである。「ペルリ提督日本遠征記」の中でも、函館山をスペイン南部の軍港ジブラルタルの岩山にそっくり、と記述されている。その遠征記には、面白いことに、この函館山のことをなぜか、テレグラフ・ヒルと呼んでいるのだ。ニヨキニヨキとアンテナ塔が林立している今の函館山の姿を予見していたようにも思える。そしてそのアンテナ塔の足下には、明治時代の巨大軍事要塞の遺構が隠れているのである。

函館には、街を間近に鳥瞰できる距離に手頃な高さの展望地点がある。その絶好の展望台が函館山の主峰御殿山である。標高334mでそこから見る函館の街の夜景は、ナポリ、香港と並んで世界三大夜景の一つと言われている。函館山からの夜景が多くの観光客を魅了するのは、くびれた街並みを両側から挟む形の函館湾と津軽海峡の漆黒の水面が街の輝きを増幅させ、夜景を際立たせて



函館山展望台からの函館市街地の眺望

くれるからである。

だが、函館山は夜景だけではなく、昼間の眺望も素晴らしい。

さらに、山からの展望だけでなく、函館山は「観音山掛け巡礼」の信仰の山でもあり、生息する植物・野鳥などが豊富で自然観察に最適な山でもあり、ハイキング・散策などの市民レクリエーションの山でもある。これは、周囲約9kmの函館山が意外に複雑な形をしており、蛇行した長い平坦な尾根を持ち、その市街地側と海側では異なる地形・地質で、そのことが多様な自然環境をつくり出していることに因っている。

多様な植物・野鳥の生息環境がある

函館山には約650種の植物が生育している。

植物の種類が豊富な理由は、一つの山に多様な生育環境があることである。山の木々は、スギ、トドマツなどの針葉樹に対して、イタヤカエデ、ハウチワカエデ、サワシバ、ミズナラ、カシワ、ヤマグワ、ミズキなどの落葉広葉樹が圧倒的に多く生育し、そのため麓から山を見ると、春の若葉の淡い緑、夏の深緑、秋の紅葉などと、季節の変化とともに山の表情が違って見える。さらに、函館山では、南北両系統の植物が入り混じり合い生育しているのも特色である。

函館山の野鳥は150種の観察記録がある。これまで観察された150種の鳥のうち、留鳥は約30種、渡り鳥は約120種と、函館山で見られる鳥の約80%が渡り鳥である。函館山は、一年を通じて観察できる野鳥の種類が多い。昭和23年に都市計画緑地に指定され、昭和39年には国の鳥獣保護区（特別保護地区）に指定されている。

函館山旧登山道コース入り口の「函館山ふれあいセンター」で情報が得られる。

はげ山が緑の山になった

函館山は昔、繁茂していたナラ、ブナ、イタヤカエデなどが乱伐されたため、はげ山になった時代があった。江戸期に幕府巡検が「箱館管内は海岸線から1里ばかりはほとんどはげ山になっている。伐採、植林に関する法を制定し、厳重に対処すべきである」と幕府に意見書を提出した記録が残っている。

間もなく意見書に応じた函館奉行が、函館山の樹木の伐採を禁止し、代わりに別の場所に伐採可能地を設けたが、別の地で伐採した材木であっても、函館で造船する場合は、「100石で100本の若木を函館山に植林すること」を義務付けるようになった。

これ以降、はげ山だった函館山の植林事業が、倉山卯之助らによって始められ、その杉林はいまも函館山麓に残っている。卯之助が行ったスギヤトドマツの植林は道南における植林の先駆けと言われているが、その後さらに、北海道における植林の模範とされた。

要塞が自然を守った

旧函館軍事要塞（函館要塞）は、日露戦争を控えた明治31年に対ロシア防備のため旧陸軍が函館山に建設を開始した軍事施設であり、明治35年にはほぼ完成した。そのころ要塞地帯法の発布により、日本各地の重要軍港を中心に要塞が設置されることとなっていた。函館には海軍基地はなかったが、当時日本最大級の函館造船所があり、さらに太平洋に抜けるシーレーンである津軽海峡に面した函館港は防衛の最重要拠点であったためである。

要塞地帯法により明治32年から昭和20年に太平洋戦争が終わるまで、山は要塞として住民の立ち入りを禁じていた。遠くからカメラを向けることも、小学生が写生をするのも禁止だった。こうして函館山の自然は、昔の姿のまま約50年間守られ

ることになった。何が辛いするか分からない。お陰で山の自然が保護され、貴重な財産を残した。函館砲台は敵艦に向かって火を噴くことはなかったが、別の意味で、郷土と自然を守った。

東京以北随一の巨大要塞であった

函館山には砲台が5カ所あった。砲台はフランス式築城方式で建設された。これは、構築した堡塁砲台の側に地下掩蔽壕を設けるといふものである。

昭和33年ロープウエーが営業を開始して以来、たくさんのお客で賑わっている展望台は、御殿山第一砲台跡の上に造られたものであり、完全地下式の掩蔽壕が駐車場の下に現存している。御殿山第二砲台跡はつつじ山駐車場の隣にあり、砲床の上に丸い木のテーブルが設置され公園整備されている。最も規模が大きい千畳敷砲台跡には、戦闘指揮所の地下室部分、砲側庫や観測所なども残っている。ほかに薬師山砲台跡には露天式の掩蔽壕があり、立待堡塁には電灯座などの遺構がある。さらに入江山観測所では下部構造体が現存している。遊歩道沿いにコンクリート砲台座やイギリス積み煉瓦壁を見つけることができる。

臥牛の頭から背中そして尻まで函館山全体に軍事施設が配置された東京以北随一の堅固な巨大要塞であった。ただ弱点は装備の貧弱さだった。函館港防御の目的で配備されたのは28cm榴弾砲で射程距離は8km。津軽海峡中央部には届かなかった。



薬師山砲台跡の露天式掩蔽壕

函館要塞の歴史遺産価値

要塞施設は歴史的に見て貴重な軍事遺産であり、明治期土木の最高水準の技術をもって建設された建造物であることから土木遺産としても極めて高い価値を有している。このような背景から、函館要塞の遺構は、歴史のあるいは文化財的に非常に価値ある近代土木遺産として注目されており、後世に継承するための保存対策や、教育資源または観光資源としての利活用が強く望まれている。

要塞施設はほとんどが、街から遠く離れた岬の突端部とか、島の断崖絶壁に近い場所にあり、それが普通である。この「函館要塞」のように30万都市の真ん中に軍事要塞の遺構が残っているということは極めて稀なことであって、函館はまだ活用されていない大きな観光資源を函館山の自然環境の中に抱きかかえていると言える。

これから必要なことは、要塞施設の変遷や役割、そして歴史的意義をきちんと後世に伝えていくことであろう。

函館山の歴史遺産を支える市民活動

これまで「函館産業遺産研究会」の实地調査によって函館要塞の軍事施設の詳細が解明されてきた。それに加えて「南北海道自然保護協会」や「函館山ふれあいセンター」などによる函館山の豊かな自然環境の保全活動が評価され、北海道遺産に指定されている。現在も、函館要塞施設の調査結果のとりまとめを進めるとともに、行政当局と協力しながら要塞遺構の測量・劣化診断などを行っており、その結果をもとに文化庁へ函館要塞の史跡指定を働き掛けている。

(参考資料)

「函館の産業遺産」函館産業遺産研究会

「函館の自然地理」大淵玄一著

「函館歴史文化観光検定公式テキストブック」函館商工会議所



立待電灯座を調査する函館産業遺産研究会

ホーレス・ケブロン
ブラキストン

駒ヶ岳
(1131m)
駒ヶ岳噴火

江差
町の構造

GLAY

菅流貯水池
(菅流ダム)
小野基樹

五稜郭
武田斐三郎

五稜郭氷
五稜郭正宗

七重浜
洞爺丸台風
S29 1155人

土方歳三

函館太洋倶楽部

金森森屋+樺二荻野=樺二森屋

三島六橋 栄国橋

函館新聞→函館毎日新聞
函館日日新聞
啄木、高橋掬太郎

御手作場

函館港(網知らずの港・巴港)
東回り航路
高田屋嘉兵衛
北洋漁業
金森倉庫

財界四天王
(渡辺、平田、今井、平塚)

箱館丸
統豊治

140° 44' E
041° 46' N

招魂社
護国神社

時任農場

西浜 仲浜 東浜
弁天町・大町→末広町→十字街(恵比須町)

銀座通り

函館電灯所

金堀川

太刀川商店

諸術調所

元町配水池

蓮葉町

赤川
亀田川
願乗寺川

弁天岬台場
武田斐三郎
備前喜三郎
入舟港
廣井勇
函館どっく

函館山
世界三大夜景

函館要塞
司令部跡

函館公園
函館図書館(岡田父子)
函館博物館

尻沢辺

穴澗

寒川

弥生小学校
遺愛女学校
聖保祿女学校
函館高女

唐牛健太郎の墓

青函連絡船
比羅夫丸
田村丸

碧血碑

函館大火

函館空襲

戸井
アーチ橋
砲台跡
袋澗

青森
AUGA

【 土木遺産と文化遺産、そして文化財 】

● 遺産

前代の人が残した業績、財産。
伝来のもの、伝統。

● 土木遺産

文化財的な価値のある土木施設・構造物。
土木技術の発展や系譜を伝え、地域の歴史や文化を物語るランドマークとして保存・活用の対象となるもの。
日本においては、主として明治から大正、昭和の戦前期に作られた近代土木施設・構造物が対象となっている。

● 土木遺産の現代的な意味

- ・ 社会基盤の生成、発展の過程を伝え、今後の人間環境が進むべき方向を示す。
- ・ 社会基盤の創造、開発、実践の実際を示し、その本質を伝承する。
- ・ 人間の生活環境創造における社会基盤施設の整備関係を示し、その影響力を表す。
- ・ 地域の生活環境をつくる営みの歴史と伝統を示し、地域の個性をアピールする。
- ・ 人間とその住まう土地(自然環境)との関係を示す。

● 文化遺産

数多い遺産の中で、その地域が価値を見出し、残していきたいと考え、意思表示をしたもの。

地域社会において、人々が価値認識をすることで文化遺産となる。価値認識なくしては文化遺産とはならない。

文化遺産はボトムアップ型であり、地域の歩みの共有(分かち合い)が文化をつくる。

● 文化財

わが国の長い歴史の中で生まれ、育まれ、今日の世代に守り伝えられてきた貴重な財産。

文化財という用語は、戦後の文化財保護法の立案過程で生み出されたもの。
制度的な価値認識と法的な手続きによる(トップダウン型)。